

第四部会

アリストテレスの友愛論とギリシャ悲劇

長 峯 素 眞 生

アリストテレス『詩学』によれば、悲劇には固有な快があり、詩人はそれを創作せねばならない。アリストテレスは悲劇に固有の快に関して具体的に何も説明しないが、多くの場合、それは再現一般を喜ぶ人間の自然本性との関係から解釈される。すなわち四章では、人間は自然本性的に何かを再現すること、および再現されたものを喜ぶものであり、とくに、再現されたものを喜ぶ理由はすべての人間にとって学ぶことが快だからであると言われる。これについてアリストテレスは絵画鑑賞を例に挙げ、絵を見る喜びは「これはあれである」というように、描かれている個々のものが何であるかを学んだり推論したりすることであると述べる。これは、感覚知覚が認知と密接に関連していた古代ギリシャの伝統的解釈を継承している。また、悲劇の再現対象は優れた行為の再現であるという六章の定義から、そこから得る喜びは、「再現される行為（これ）は優れた行為（あれ）だ」と認知することにあると、ひとまずは言えよう。しかし、そもそも再現された行為を見るとはいかなる事態なのか。本発表はその説明を試みるものである。

行為を見ることおよび快との連関は、『ニコマコス倫理学』

八一九巻で論じられる善き人同士の友愛においても言及される。アリストテレスはあらゆる共同関係のうちに属する人間同士の結びつきを広く友愛と呼び、また、友人の存在は人生にとって必須であると言う。それゆえ、我々は飲食など自分独りで活動するときよりも、友を愛するとか、友との関係において何かを為そうとする場合に、もっともよく熟慮することを求められるだろう。この点に関して、悲劇はまさに友愛関係にある人々の間に生じる苦難を描いており、複数の異なる友愛関係の中で最善を為そうとする主人公の行為を再現しているのである。

さて、アリストテレスによれば、友愛は共同関係の種類に応じてさまざま存在するが、徳にしたがった善き人同士の友愛が究極的な友愛である。そして、善き人が同じ善き人である友を必要とするのは、自分に固有な行為を見るのを欲するからだと言われる。我々は一般に、自分自身に固有な、あるいはそれに類似した行為を快く思うが、自分の行為は見えにくく、他人の行為の方がより観察しやすい。善き人の行為はそれ自体立派で快いという点で、互いに同じであるか、類似している。それゆえ善き人々にとって、自分に固有な行為を見ることは友の行為を見ることに等しく、また快なのである。

他方、悲劇の主人公と観客は過失を犯す存在であるという点で似ており、悲劇を見るのが快であるのは、まずはこの類似点が確保されているからだと考えられる。しかし、悲劇の主人公は徳において観客よりも優れている。それゆえ、主人公の行為を見ることは自分より優れた人物の行為に先立つ熟慮を知る

ことでもある。なぜなら、悲劇は登場人物たちの一人称語りで行進し、すべての思いと行いが言葉によって明かされるからである。行為の始点であり、行為の内容を決定する熟慮の過程を知るとい意味で、悲劇で再現される行為を見ることは、その行為を実行することに比肩すると言いうるのではないだろうか。

アリストテレスによれば、徳の形成は行為によってなされる。それゆえ、行為を見ることが善き行為の一つの実践訓練たりうるならば、悲劇は友愛ゆえの活動をより善くするための一助となりうる。悲劇の上演はディオニュソス信仰に基づく国家行事であったが、アリストテレスは同じ共同体に属する市民たちの絆、すなわち社会的友愛をより善く、かつ盤石にする方法を、宗教とは別の、高貴な行為を再現する悲劇にみとめ、期待していたのではなからうか。

死を意味づける語り

——古代キリスト教周辺と死生学——

土居 由美

宗教をどのような視点から捉えるかという課題は宗教学における基本的問いであり、これについて従来様々な視角が提示されてきた。それらの一つとして、様々な意味づけ／解釈行為という視点から宗教を捉えるという仕方は、宗教学の普遍性或いはその多様な方法論の展開という観点からのみならず、死生学

との関連性においても改めて実践的であると考えられる。

そのような問題意識を念頭に置きつつ、死を意味づける／解釈する行為について、その典型的で具体的な一例として新約聖書福音書「受難物語」中の「闇」をめぐる表象から辿る。

新約聖書、特に四福音書においては、イエスの生と死が意味づけられ、その結論が提示される。その物語上のクライマックスは各福音書において受難物語中にあるといつてよい。この物語部において、実在の人であるイエスの死と生がどのように意味づけられていったのかという過程が詳細な分析によって辿られる。従来のキリスト教神学においては、この問いは「キリスト論」として表現されてきたといえるが、これに対してこの同じ問いは、死を意味づける語りとして広く一般的な視点に立ち宗教学的に記述されることが可能でありまた有益であるといえる。新約聖書の四福音書中、マルコ、マタイ、ルカの共観福音書受難物語において、イエスが死にゆく場面は、全地を覆う「闇」の記述によって始められ、この「闇」はイエスの死の瞬間まで継続する。

これらのうちマルコにおける「闇」の描写は、イエスの死を旧約聖書の文脈に語られる神による救済の業に連続するものと意味づけられたものである。その上で、その直前に生じる「闇」が旧約に表れる典型的な「闇」とパラレルに描かれていると捉えられる。マルコにおいて、「イエスの死」という悲惨な出来事は、旧約聖書の文脈を手掛かりとしつつ、なお広く世界に渡る神の救済の出来事と解釈が広げられて、その読者にイエスの死と共に「神の審判」次いで「神による救済の業」が遂行され